

## 1 研究課題名

対象者の特性に応じた効果的な取調べ手法に関する研究

## 2 研究担当者

主研究担当者 横田 賀英子 犯罪行動科学部捜査支援研究室  
他研究員 5名

## 3 研究期間

平成26年4月～平成30年3月（4年計画）

## 4 研究予算

平成26年度	16,146千円
平成27年度	17,072千円
平成28年度	17,363千円
平成29年度	18,883千円

## 5 研究の目的

対象者の特性に応じた効果的な取調べ手法について、面接調査や質問紙調査、実験などの方法を用いて心理学的な研究を行うことにより、対象者の特性の把握方法及び対象者の特性に応じた効果的な取調べ手法を明らかにする。これらの研究知見により、取調べの高度化、適正化に資する資料を作成する。

## 6 成果

### (1) 当初予定していた成果

本研究では、下記の成果が得られた。

- ① 取調べ官対象の質問紙調査により、取調べ官の性格が取調べ手法に関連していることが示された。共感性尺度のうち視点取得（相手の立場に立って物事を考えるという共感性）の得点が高い者ほど、積極的傾聴の手法を利用していた。取調べにおいて被疑者から話を聴く際に重要な手法である積極的傾聴を教養する際には、視点取得を取ることの重要性についても言及すべきであることが示唆された。
- ② 被面接者の被誘導性を測定するための被誘導性尺度（GSS2: Gudjonsson Suggestibility Scale 2）の日本語版の妥当性を、インターネット調査場面において検証した。同調査では、教示が誤っていたと謝罪し、自由再生を行った場合に、後の誘導質問に関する抵抗力が増すことが示唆された。
- ③ 一般人対象の実験により、被面接者を誘導することなく適切に聴取するための

効果的な取調べ手法について知見を見出すことができた。実際に体験した内容の誘導されやすさに影響する要因（質問方法、体験から想起までの日数、体験の自己関与度）を明らかにした。特に、質問方法については、「～でしたよね」と尋ねる誘導質問や「はい・いいえ」質問よりも、選択式質問の誘導のリスクが最も高いことが明らかになった。さらに、グラウンドルールの活用が、高齢者、一般人ともに誘導のリスクを低めることが明らかになった。最後に、被誘導性を高めることなく被面接者から多くの情報を得ることを目的として開発された修正版認知面接は、電話による聴取やインターネットを介した聴取でも効果があることが実証された。

- ④ 知的障害者に対する取調べにおける配慮事項について知見を見出すことができた。取調べ官に対する半構造化面接による調査から、取調べ官は対象者の理解力と被誘導性に配慮し、その多くは積極的傾聴と発問方法への配慮に心がけ、グラウンドルールの説明を行っていることが示された。グラウンドルールの複数説明していた取調べ官の方で高い量と質の供述を得る傾向が認められた。この他、知的障害のある可能性が高い者をスクリーニングするための心理検査について、カルチャーフリー版を作成した。

- (2) 当初予定していなかったが副次的に（あるいは発展的に）得られた成果

公判に提出された心理鑑定について、本研究課題等で得られた知見を踏まえた上で、意見書を作成し提出した。

- (3) 当初想定していたが得られなかった成果

なし

## 7 成果の発表

- (1) 論文・ノート（欧文）

- 1) The relationship between police officers' personalities and interviewing styles.  
Wachi, T., Watanabe, K., Yokota, K., Otsuka, Y., & Lamb, M. E.  
*Personality and Individual Differences*, 97, 151-156 (2016).
- 2) Police officers' ability to detect lies within a deception paradigm.  
Wachi, T., Kuraishi, H., Watanabe, K., Otsuka, Y., Yokota, K., & Lamb, M. E..  
*Psychology, Public Policy and Law*, 23, 301-311 (2017).
- 3) Effect of rapport building on confessions in an experimental paradigm.  
Wachi, T., Kuraishi, H., Watanabe, K., Otsuka, Y., Yokota, K., & Lamb, M. E.  
*Psychology, Public Policy and Law*, 24, 36-47 (2018).
- 4) Comparison between the standard and online administration of the Gudjonsson

Suggestibility Scale 2 and effects of post-warning.

Wachi, T., Watanabe, K., Yokota, K., Otsuka, Y., & HIRAMA, K.

*Legal and Criminological Psychology*, advance online publication (2018).

- 5) Use of cognitive interview techniques with ground-rule instruction in internet surveys.

Yokota, K., HIRAMA, K., Wachi, T., Otsuka, Y., and Watanabe, K.

(under review).

(2) 論文・ノート（和文）

- 1) 受刑者の自白理由と取調べの手法.

和智妙子, 渡邊和美, 横田賀英子, 大塚祐輔, Lamb, M.

心理学研究, 87, 611-621 (2016).

- 2) 聴き出す技術－「取調べ（基礎編）」のポイントと発展.

和智妙子

季刊現代警察, 16-23 (2016).

- 3) 取調べにおける否認と自供.

和智妙子

日本犯罪心理学会編, 『犯罪心理学事典』丸善出版, 234-235 (2016).

- 4) 虚偽自白と被暗示性.

和智妙子

日本犯罪心理学会編, 『犯罪心理学事典』, 丸善出版, 236-237 (2016).

- 5) 体験した事実を聞き取るための面接スキル.

渡邊和美

法と心理学, 16(1), 43-51 (2016).

- 6) 捜査支援技法.

渡邊和美

守山正, 小林寿一（編）ビギナーズ犯罪学, 成文堂, 377-388 (2016).

- 7) 犯罪捜査における心理学－取調べに関する心理学的知見.

和智妙子

罪と罰, 54, 22-34 (2017).

- 8) 取調べを取り巻く課題.

渡邊和美

越智啓太, 桐生正幸（編）テキストブック 司法・犯罪心理学, 466-490 (2017).

- 9) 被害事実と供述－被害者供述の取得とその評価.

渡邊和美

佐藤博（編）捜査と弁護, シリーズ 刑事司法を考える 第2巻, 岩波書店, 76-98

(2017).

- 10) 電話による聴取における認知面接技法の教示の有効性.

平間一樹, 横田賀英子, 和智妙子, 大塚祐輔, 渡邊和美

(投稿中).

(3) 口頭発表

- 1) How to minimize interrogative suggestibility: Examination of the Japanese online version of the Gudjonsson Suggestibility Scale 2.

Wachi, T., Yokota, K., Otsuka, Y., HIRAMA, K., & Watanabe, K.

EAPL+World 2015, abstract, P271-272 (2015).

- 2) Interrogation of suspects with intellectual disabilities in Japan:

Semi-structured interviews with police officers.

Watanabe, K., Wachi, T., Yokota, K., Ono, S., Otsuka, Y., & HIRAMA, K.

American Psychology-Law Society Annual conference (2015).

- 3) 被疑者取調べに関する調査研究 (シンポジウム「心理学的知見を踏まえた捜査面接法」).

和智妙子

日本心理学会第79回大会論文集SS-053 (2015).

- 4) 取調べ (シンポジウム「犯罪捜査で真実に迫るための心理学的技術」).

和智妙子

日本犯罪心理学会第53回大会, 犯罪心理学研究第53巻特別号, 256-257 (2015).

- 5) Current practices and research findings regarding suspect interviews in Japan.

(Symposium 'Investigative interviewing: What we know and what we need to do in non-Western countries')

Wachi, T.

The 31st International Congress of Psychology (2016).

- 6) Symposium 'Investigative interviewing: What we know and what we need to do in non-Western countries'

Wachi, T., & Watanabe, K.

The 31st International Congress of Psychology (2016).

- 7) Preliminary development and validity assessment of a culture-free version of the NRIPS and NCNP's Forensic Ability Screening Test (N2-Fast).

Watanabe, K., Wachi, T., Yokota, K., Otsuka, Y., HIRAMA, K., Okada, T., & Ando, K.

The 31st International Congress of Psychology, Program, 237 (2016).

- 8) Use of the cognitive interview technique on the internet: Respondents' free

recall and resistance to misleading questions.

Yokota, K., Wachi, T., Otsuka, Y., Hirama, K., and Watanabe, K.

American Psychology-Law Society Annual Conference, 139 (2016).

- 9) 実際に体験したことは、どのくらい誘導されるのかー自己関与度との関連についての検討。  
渡邊和美, 平間一樹, 和智妙子, 横田賀英子, 大塚祐輔  
日本犯罪心理学会第54回大会, 犯罪心理学研究第54巻特別号, 58-59 (2016).
- 10) Examining immediate and delayed suggestibility using the Gudjonsson Suggestibility Scales 2.  
Wachi, T., Yokota, K., Otsuka, Y., Hirama, K., & Watanabe, K.  
American Psychology-Law Society Annual Conference, 144 (2017).
- 11) The applicability of cognitive interview instructions via telephone-based interviews.  
Hirama, K., Yokota, K., Wachi, T., Otsuka, Y., & Watanabe, K.  
10th Annual conference of the International Investigative Interviewing Research Group (2017).
- 12) 発問による誘導ー実体験からの経過時間の影響。  
渡邊和美, 平間一樹, 和智妙子, 横田賀英子, 大塚祐輔  
日本犯罪心理学会第54回大会, 犯罪心理学研究第55巻特別号, 28-29 (2017).
- 13) 非対面による認知面接の有効性に関する検討。  
平間一樹, 横田賀英子, 和智妙子, 大塚祐輔, 渡邊和美  
第54回日本犯罪学会総会 (2017)